

受容能力の向上を、常日頃から心懸けよう

今年も後一日を残すだけになったが、今年を振り返ると今年もたくさんの方々との出会いがあった。

特に印象に残っているのは、授業で出会った学生とのメール交流から見えてきた、家族関係、友人関係等での精神的孤独感・疎外感を抱いている学生たちが各学校共に少なからずいたことであった。

プライベートな、それもかなり深刻な内容まで話してくれるなど、週一回の非常勤の身なのに心を許せる大人として感じてくれたのは嬉しいが、メール文章からだけではどう受け取ることが顔が見えないだけに文章作りには神経を使った。

だが、日に数通メールをやりとりすると、それなりに前向きなってくれたメールにホッとしたもの。

それにしても、どうしてこうも若者たちは人間関係に疲れているのだろうか。
生きるエネルギーに満ち溢れている姿こそ、若者の象徴だと思うのだが…。

こうした若者に出会うと、石井十次（日本の孤児救済の先駆者）の「親のない孤児よりももっと不幸なのは、心の迷い子、精神の孤児なのです。」の言葉が思い出され、周りの大人（親も含め）たちは、若者の想いに寄り添う声かけをして欲しいとつくづく思った（ひょっとすると、大人たちも世相から来る孤独感故に、相手を思い遣る心の余裕をなくしているのかな？）

こうした中、今月初めて出会った幼少の障害児の母親からいただいた次のメールには、こちらまで癒され元気をもらえた。

【 もし〇〇（お子さんのお名前）が生まれたことで私たち家族が不幸なのだとしたら、それは〇〇の存在を認めていないことで、〇〇に対して失礼だし、障害を含めて〇〇なのだから、まずは自分たちが障害を受け入れ、後は、みんなで毎日楽しく笑って暮らそう。」と、告知のショックからひと段落した時に夫とそう話していたことを思い出しました。 】

障害児・者や難病の方、その親御さんに限らず、人生とは予期せぬ不都合の連続にどう向き合い、どう乗り越えて行くかの作業過程とも云えるだけに、この母親のように、「自分に不都合なことが起きた時に、その不都合さの中でも人間として生きているという証を見ることができる能力（受容能力）」の向上を、常日頃から心懸けることが大事な気がする。

やはり、コミュニケーションとは双方性のある即応的・螺旋的やりとりであることを、改めて認識した一年であった。